

再論▶經濟白書

戦後 經濟の 軌跡

編集代表

金森久雄

再論▶經濟白書

戦後 經濟の 軌跡

編集代表

金森久雄

は し が き

第一回の経済白書がでたのは一九四七年七月のことである。ほとんど四三年も前のことだ。

この間に日本経済は全く変貌した。実質GNPをみると、一九四七年にくらべ一九九〇年は約二〇倍である。現実の変化は、GNPのような量的な指標では到底表わせない程大きい。トランジスタ・ラジオ、テレビ、コンピュータ、原子力発電、旅客機、新幹線等何一つ存在しない時代から出発して、今日の豊かな社会に到達した。

経済白書はこの間の年々の経済状況を記述し、政策を解説し、時には多少の政策提言も行なってきた。

白書はもちろん政府の文書であるが、経済安定本部とその後身である経済企画庁の内閣調査課長が自ら執筆する例になっている。本書は、歴代の白書の執筆の責任者が、当時をふりかえり、自分が担当した部分につき再論したものである。

あとになってみると、分析が不十分だったと反省させられることもある。政策の失敗もある。うまく先を洞察したと満足する点もないではない。政治的な理由で、思うとおりに書けなかった

苦い思い出もある。本書は単なる懷旧談ではない。章によつて、色合はいろいろではあるが、いずれも過去を振り返ることによつて、将来に役立てようという気持ちで書かれている。今日の繁栄も、土地の高騰や社会資本の不足などの諸欠点もいずれも過去の成長の仕方や政策の所産である。本書は戦後経済の記録であるとともに、その軌跡を再検討することによつていくぶんとも未来の指針となることを狙っている。

白書の執筆の責任者は、別表に示すように第一回の一九四七年から一九八九年まで一八八人いる。このうち、後藤誉之助、向坂正男の両氏は亡くなられた。赤羽隆夫氏は、本書企画当時現職次官であつたため、執筆を辞退した。矢野智雄氏は、課長外遊中の代理執筆であつた。以上の四人を除いた一四人が、本書を執筆している。

序章では、第一回の白書の執筆者の都留重人氏が当時を回想し、これまで発表されていなかったいろいろな事情を明らかにしている。最終章では大来佐武郎氏が、今後の課題につき述べている。一九四七年から六〇年までは私が概観した。それ以後については、それぞれの白書の執筆者が、文字どおり再論している。但し、一九五一年、五二年については、白書の責任者であつた赤羽氏に代わり、横溝雅夫氏が執筆した。

本書のような出版物の場合、執筆者中の最先輩が編集の代表者となるべきものであらう。私が編集者となるのは僭越であるが、当初私が中央経済社から相談を受け、また年代からいっても中間にあつて白書執筆者の全員と親しく、いろいろお願いするのに好都合であることからその役割

をお引き受けした次第である。

本書の成立のために、尽力された中央経済社の江守真夫氏に御礼を申し上げる。

一九九〇年四月

金 森 久 雄

戦後四三年間の経済白書

(発表年)	表 題 (副 題)	執筆責任者
昭和二二年	経済実相報告書 (付・経済緊急対策)	都留重人
二三	経済情勢報告書 (回顧と展望)	大来佐武郎
二四	経済現況の分析 (付・経済安定の原則)	〃
二五	経済現況報告 (安定計画下の日本経済)	〃
二六	年次経済報告 (以下表題は同じ)	〃
二七	(独立日本の経済力)	後藤誉之助
二八	(自立経済達成の諸条件)	〃
二九	(地固めの時)	〃
三〇	(前進への道)	向坂正男
三一	(日本経済の成長と近代化)	矢野智雄
		後藤誉之助

三二	(速すぎた拡大とその反省)
三三	(景気循環の復活)
三四	(速やかな景気回復と今後の課題)
三五	(日本経済の成長力と競争力)
三六	(成長経済の課題)
三七	(景気循環の変貌)
三八	(先進国への道)
三九	(開放体制下の日本経済)
四〇	(安定成長の課題)
四一	(持続的成長への道)
四二	(能率と福祉の向上)
四三	(国際化のなかの日本経済)
四四	(豊かさへの挑戦)
四五	(日本経済の新しい次元)
四六	(内外均衡達成への道)
四七	(新しい福祉社会の建設)
四八	(インフレなき福祉をめざして)

高橋毅夫	佐々木孝男	内野達郎	宮崎勇	金森久雄	穴戸寿雄	向坂正男
	〃	〃	〃	〃	〃	〃

四九	(成長経済を超えて)	高橋 毅夫
五〇	(新しい安定軌道をめざして)	〃
五一	(新たな発展への基礎のため)	赤羽 隆夫
五二	(安定成長への適応を進める日本経済)	〃
五三	(構造転換を進めつつある日本経済)	横溝 雅夫
五四	(すぐれた適応力と新たな出発)	〃
五五	(先進国日本の試練と課題)	守屋 友一
五六	(日本経済の創造的活力を求めて)	〃
五七	(経済効率性を活かす道)	勝村 坦郎
五八	(持続的成長への足固め)	〃
五九	(新たな国際化に対応する日本経済)	宮本 邦男
六〇	(新しい成長とその課題)	加藤 雅
六一	(国際的調和をめざす日本経済)	〃
六二	(進む構造転換と今後の課題)	〃
六三	(内需型成長の持続と国際社会への貢献)	土志田 征一
平成 一	(平成経済の門出と日本経済の新しい潮流)	〃

目次

序章 「経済白書」第一号についての回想

第1章 戦後経済の概観

1	復興期の苦闘	12
2	高成長期へ入る	17
3	貿易自由化の推進	21
4	転型期から構造不況へ	25
5	イザナギ景気の到来	30
6	円切上げ	36
7	日本列島改造論の波紋	39
8	石油危機とその克服	43
	経済政策と経済思想	46
9	円高の危機とその克服	49

第2章 転型期をめぐる

1	それまでの景気論争	56
2	投資が投資をよぶ効果	61
	成長経済の限界とその矛盾・61	
	新しいインフレ論・64	
3	「転型期」が生まれるまで	66
	堀氏のダイナミック・モデル・67	
	「転型期」という言葉・69	
	転型期白書の出来るまでのエピソード・72	
4	転型期論のその後	74
	転型期論の自己反省・77	
	第三の中期循環は起こるのか・78	
	景気調整の年の五つの課題・82	
5	先進国への道	83
	不均衡の三つの課題・84	
	是正しやすい歪みとし難い歪み・90	

先進国としてどのようなイメージか・90

第3章 「四〇年不況」とその克服

1	開放体制を謳った『三九年白書』	94
2	公害対策を強調して警鐘を打ち鳴らす	97
3	マクロとミクロの乖離	99
4	昭和二年恐慌の再来か——歴史的類推の不安	102
5	強化された景気安定力	104
6	強い輸出競争力に支えられた経済	106
7	「四〇年不況」の嵐に直面	111
8	ケインズ型財政政策への急転回	114
9	大型景気の始まり	117

第4章 「豊かさ」とは何か

1	経済力と生活の質	122
2	高度成長の生活面での成果	124

第5章 円切上げの時代

3	経済力と生活実感	131
4	真の意味での豊かさの実現	140
1	戦後昭和経済史上でも重要な分岐点	144
2	「いざなぎ景気」再論	145
	桁ちがいのスケール	145
	ひた寄せる世界インフレの波	146
	国際収支黒字下での異例の金融引締め	150
	万国博開催中の公害爆発	152
3	日本経済の新しい次元	153
	日本経済の国際的転換	154
	インフレなき繁栄	158
	高度な福祉経済の達成を	162
4	国際通貨危機下で強いられたい経済白書の苦戦	163
	微調整には終わらなかった金融引締め	163
	波乱万丈の国際通貨情勢	165

第6章 列島改造と福祉

5	昭和四六年度経済白書と円切上げ始末記	167
	円切上げの伏線を引いて・167	
	「内外均衡達成」と「新しい政策体系の確立」をめざして・170	
	円切上げの決着と仕残された問題・174	
1	新しい福祉社会の建設	178
	「反省白書」の所以・178	
	昭和四七年の経済動向・179	
	政策運営に対する反省・180	
2	三つのギャップ論	183
	成長と福祉の乖離はなぜ起こるか・183	
	新しいポリシー・ミックス・185	
	先見性もったインフレ論・186	
3	インフレなき福祉をめざして	187
	円切上げの効果と福祉充実・187	
	インフレの進行過程・188	

すでに存在した全面的なインフレ予想・ 190

第7章 新しい時代への過渡期

1 三つの大潮流が招いた混迷 194

成長軌道の転換・ 194

経済政策の失敗・ 195

石油危機の勃発・ 197

「時代の転換期」・ 197

2 過剰流動性インフレ 198

高度成長から安定成長への移行期・ 198

ギャロツピング・インフレ発生の背景・ 200

3 景気回復の誤診 202

誰もが考えた「どしゃ降り」の大不況・ 202

「円切上げ不況」に対する錯覚・ 204

杞憂に終わった「円切上げ不況」・ 204

4 第一次石油危機 207

第一次石油危機の始まり・ 207

第8章 石油危機克服

I 石油危機後の経済の推移	229
7 未来からの情報を受け止める	225
6 企業経営の転換	221
高橋亀吉氏の慧眼	221
歴史的転換を示す自己資本比率の動向	222
基本となる財務政策の確立	224
5 トリレンマの克服	215
石油危機による三重苦	215
五つの課題を担った世界経済	216
日本的な所得政策の展開	218
過渡期としての一九七〇年代	220
なぜ日本経済は石油に弱いのか	209
苦渋に満ちた昭和四九年白書	210
「狂乱物価」への対応の実際	212
産業構造の転換と日本経済の飛躍	214

1	經濟の推移	229
	石油危機の影響とその収束過程	229
	經常収支の大幅黒字化と急激な円高	235
	第二次石油危機の登場	236
2	石油危機後の主要政策の展開	237
	財政政策	237
	金融政策	240
	構造不況業種対策	241
	貿易摩擦対策	242
	円高対策等	244
	省エネルギー対策	245
II		
3	昭和五三年度白書（構造転換を進めつつある日本經濟）のポイント	248
3	昭和五二年度の景氣局面	248
	景氣情勢	248
	減量經營の進展	252
	消費マインズの改善	253
4	經營収支の黒字幅拡大と円高問題	257
	貿易収支黒字の背景	258

円高の経済に与える影響・	262
円高の国際収支に与える影響・	264
5 日本経済の構造変化	270
産業構造の特徴と石油危機後の変化・	270
新状況に適応しつつあるわが国産業・	277
III 昭和五十四年度白書（すぐれた適応力と新たな出発）のポイント	282
6 石油危機後の調整過程の終了	283
均衡回復の五つの側面・	284
内外均衡の背景・	286
盛り上がりを示し始めた民需・	293
景気的情勢判断・	296
7 インフレの未然防止の重要性	298
注目を要する物価情勢・	298
インフレの経済コスト・	299
昭和四八―四九年の物価急騰の教訓・	300
物価情勢の現段階・	304
8 活力ある安定した発展の基礎固め	305
日本経済の体質強化・	306